

豚 客 珍 客

鉄道写真家 櫻井 寛

鉄道が発達した国々では、列車に乗ることはたやすい。切符さえ入手すればいいからだ。難しいのは発展途上国である。

まず、切符が買えない。発券窓口は長蛇の列。言葉も通じにくい。たとえ乗れても列車は超満員で、いつ発車するのか、どれだけ遅れるのか、どこに行くのか分からないことさえある。

それはミャンマーでの出来事だった。私は古都バゴーから、ニャンカーシー行きの列車に乗ろうとしていた。切符は買えた。けれども、車内はもちろん、列車の屋根まで、人、人、人でまさに超満員。

先頭から最後部まで、どこかに潜り込めるすき間はないものか探し歩く。すると、一番後ろに連結された屋根なし貨車が、男二人だけのガラスキである。聞いてみれば、乗っていいと言う。有り難き幸せ！ とばかりに乗り込んでみれば、普段は飼料とか堆肥でも運んでいるのだろう、匂いがとてもきつい。でもそれさえ我慢すれば、すいているし、風通しはいいしで、快適である。

ところがである。発車しておよそ十分も走ったであろうか、次の駅に停車すると、待っていたのは、豚君の団体であった。

豚とはいえ我が身の行く末が分かるのであろうか、貨車に乗せられることに必死で抵抗する。男二人だけでは積み込み作業がはかどらない。

突然、視線は私に向けられた。間髪を入れず、豚をつなぐ荒縄が私に投げ渡された。臨時運豚業者に任命されたのである。嫌がる豚と格闘すること数分、16頭全員が我が車両に乗車完了。豚君たちにとっては、私のほうが珍客であったに違いあるまい。

(2000年2月2日朝日新聞夕刊“私空間”より)